

1面から続く

受け継がれる 「精神の自由」

高級邸宅の代名詞、芦屋。その街が「アバンギャルドな芸術運動の故郷」の顔も持つと言えは意外だろうか。阪神間モダニズムの豊かな土壌に咲いた「前衛」という名の「花々」。鮮烈な故郷、人を惹きつけた。

数年前は、欧米帰りの写真家中山道太(一九五五―一九四九年)が「芦屋カメクラブ」を創設。リアリズムとは別の、芸術性豊かな写真世界を切り開いた。

戦後、特筆すべきは、前衛集団「具体美術協会(具体)」の発祥地となったことだ。「GUTAI」。

「具体美術協会(具体)」の発祥地となったことだ。「GUTAI」。浮世絵とも、欧米美術に影響・衝撃を与えた数少ない日本美術の一つである。

グループ結成は一九五四年。芦屋の前衛画家古原治良(一九〇五―七二年)の下に、神戸や阪神間

の若き美術家たちが集まった。「人のまねをするな」「これまでに無いものをつくれ」

古原の叱咤激励、若者らは型破りのモダンアートを次々と発表していった。発表の場も、画廊・美術塾だけでなく、野外公園やホテルのステージなど選ばれた。

尼崎の白髪一雄(一九一三―一九七九)らつるしたローブに浴する下がり、足でエネルギーを消費する抽象画を描いた。西宮の嶋本昭三(一九一三―一九七九)は、大団に顔料を詰めて画布へ発射した「大団顔面」で気を吐いた。木村に張った紙を突き破るパフォーマンスの村上三郎(一九三三―一九六六)も、明確する色電球を身にまとう「電球服」の田中数子(一九三二―二〇〇五年)も……

驚くべき個性が集い、はじけた。「みんな、天才やっつたかなあ」とにかく熱気、情熱があった」と元水定正(一九一三―一九七九)は振り返る。

「具体」の先駆性や魅力を、先に認めたのは外国人だった。フランスの評論家ミシェル・タビエは、自費のフットペインティングをはじめ、激しく大胆な抽象画を描いた。米国では、「具体」のパフォーマンスの数々が、身体を用いた芸術表現「パフォーマンス」の先駆けとして紹介された。



古原治良さん

「具体」は古原の急進、七二年に活動の幕を下ろすが、近年、海外での再評価は、より高まっている。「古原の鋭い『眼』が『具体』を支えた」と話すのは、国立新美術館の平井章一主任研究員。

古原は作品に「あかん」「ええ」と書いただけで、改善はなほ指摘



第6部 美の冒険者たち

兵庫へ 挑む

顔字は 牛丸好一さん

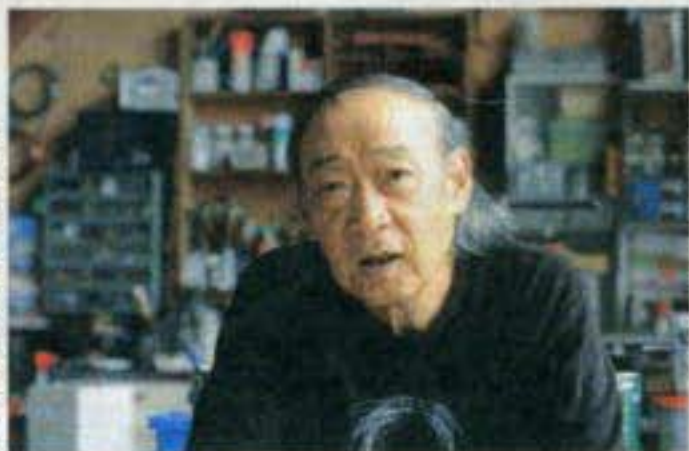
人・地域・未来

110

2008年 創刊110年

「具体」の元メンバー嶋本昭三さん(左手前)に前導する。左から松井コ一へーさん、半田まゆみさん、山本ヨシコさん、「新聞女」こと西沢みゆきさん=西宮市甲子園口のアトリエ(撮影・斎藤雅志)

② 前衛の系譜



国際的に活躍する河口健夫さん

「独立性」「個性」を重視した「具体」。そして、六〇年代半ば、神戸の若手九人が旗揚げした「グループ(位)」は、異なる前衛の道を歩いた。

チームの一つが表現の「匿名性」だ。例えば、色も構図も同一の絵を描き、作者名を入れ替え、並べて展示。「作者とは」「個性とは何か」を考えさせた。

「具体」の元メンバーも、多くが既に高齢。それでも、元水や嶋本の創作意欲は衰えない。「新しいものをどんどんつくるのが好きだ。死ぬまで『具体』と嶋本。ほかにも上野智拓(一九三三―一九七九)も、山崎つる子(一九三三―一九七九)も、今井隆雄(一九三三―一九七九)も、現役で創作を続ける者が少なくない。とりわけ熱気盛んなのが、神戸の堀尾貞治(一九一三―一九七九)年間、百回近い個展やグループ展を挙げ、パフォーマンスにも力を注ぐ。来春には国際美術館「インド・トリエンナーレ」への参加を控える。



堀尾貞治さん

「具体」は理由より直感・行為を大事にしたが、グループ(位)は、哲学的ともいえる思考を重ね「存在」や「認識」を問い掛けた。メンバーの一人、神戸出身の河口健夫(一九一三―一九七九)は「見えること」「見えないこと」の関係性を長年探求、より思索を深め、国際的作家としての地位を確立している。

ほかにもグループ(位)のB.O.ゼロ(一九三三―一九七九)など、過激で個性的な集団が神戸の街を騒がせた時代があった。「具体」の陰に隠れがちな前衛運動の足跡も今、求められている。



LOCOSさん

「匿名性」を重視した「具体」の系譜。武勇になると教えてもらった」と声を弾ませる。

古新聞を使った座席の紙ドレスに身を包むパフォーマー、「新聞女」こと西沢みゆき(一九三三―一九七九)は、昨年秋、北京で高さ二十メートルを超えるクレイオンにつるされ、長さ十数メートルの紙スカート姿を披露。市民の喝采を浴びた。「実は高所恐怖症。でも喜んでもらえると気がなななくなるとサービスマン精神を忘れられない。」

美術界も多様・多極化し、それが最先端かは不明確。前衛なき時代「アトリエ」もいわれる。だが「面白がり」の関西らしい前衛精神は、脈々と受け継がれている。(敬称略)

(文化生活部・堀井正樹)